

登録有形文化財

畑田家住宅活用保存会年報

No.17 / 2018



＜畑田家住宅活用保存会 2018 年度行事予定＞

初夏の一般公開とフォーラム 2018 年 5 月 20 日(日)

「木造住宅これまでとこれから」

建築家 石井智子

秋の一般公開と科学フォーラム 2018 年 11 月 11 日(日)

「巨大分子の面白さープラスチックとゴム」

大阪大学名誉教授・畑田家当主 畑田耕一

春の一般公開と古民家フォーラム 2019 年 3 月 10 日(日)

「古民家に学ぶ」

寺西興一、青山修司、吉村堯、細見克、地村邦夫

初夏の一般公開と第 22 回畑田塾 2019 年 5 月 19 日(日)

「歴史ある畑田家住宅で聴く、歴史あるヴァイオリンとピアノの音色」

ヴァイオリン 木野雅之 (日本フィル・ソロコンサートマスター)、ピアノ 吉山輝

会長就任あいさつ

第三代会長 畑田出穂

羽曳野市の畑田家住宅はおよそ 130 年前に建築された庄屋敷で、広い敷地の北側東に主屋が、南側に道路に面した長屋門とそれに続く二棟の蔵があり、白漆喰塗の外観は、旧家の風格を良く伝えています。平成 11 年には国の登録有形文化財に選ばれ、それを機に私の父であり当主の畑田耕一を中心にして、文化財の一般公開、教育・文化活動を目的としたフォーラムならびに小・中・高校生を主対象とする畑田塾が発足しました。ノーベル賞受賞者の白川英樹先生、作家の筒井康隆氏をはじめ、第一線でご活躍の各界の専門家をお招きし、ご講演をいただいております、その活動も今年で 18 年目になります。

一般公開やフォーラムに多くの方のご参加をいただき、建物また文化の素晴らしさを知っていただくのはとても嬉しいことです。このような活動が 18 年にわたって続けてこられたのも畑田家住宅活用保存会の会員の皆様の深いご理解と羽曳野市の熱心なご支援があったからこそです。

この度、第二代会長の中村貞夫氏が相談役に引かれましました。長年にわたるご尽力を深く感謝いたします。中村氏は私の叔父にあたり、畑田家住宅にご家族とともに長年住まわっていました。また画家として納屋をアトリエにして、現在も絵を描き続けておられます。私自身もこの家で幼少期の一時期を過ごしました。そのころからすでに 50 年の年月が流れ世の中は大きく変わりましたが、この家のたたずまいは当時と変わることなく美しさを感じさせてくれます。家というのは英語でいうと Home となります。建物という意味もありますが、米国の歌手、故ジョン・デンバーの”Country road”という曲の歌詞の一節に”Country road, take me home. To the place I belong.”とありますように自分が所属するところ(故郷)という意味も持ちます。一般公開やフォーラムに参加された方々から、人と建物の調和が醸し出すぬくもりを故郷のように感じていただけることを願っております。

みなさまに教をを請うことや、不慣れな部分もたくさんありますが、お力添えをいただき、新しい気持ちで全力を尽くす覚悟でいますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成 29 年度 事業報告

1. 初夏の街歩き 2017 年 4 月 23 日
「古代を楽しむ ― ぶらり古墳巡り」
羽曳野市文化財保護課参事 吉澤則男
2. 秋の一般公開と科学フォーラム 2017 年 11 月 12 日
「脳と AI とゆらぎ」
大阪大学/情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター(CiNet) センター長 柳田敏雄
3. 春の一般公開と第 21 回畑田塾 2018 年 3 月 18 日
「自分探しの旅―科学、音楽、美術を通しての提言」
大阪大学名誉教授 北山辰樹、声楽家 畑田弘美、画家 中村貞夫
4. 出版
「脳と AI とゆらぎ」
(出版シリーズ No.13) ISBN978-4-903247-12-0
大阪大学/情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター(CiNet) センター長 柳田敏雄
5. 畑田家当主 畑田耕一による教育奉仕活動等
4 月 24 日 西宮市立西宮高等学校
6 月 22 日 豊中市立箕輪小学校
7 月 11 日 豊中市立箕輪小学校

役員 (2018 年度)

相談役	中村貞夫
会長	畑田出穂
副会長	畑田拓男、畑田達也
事務局長	北山辰樹
幹事	奥田 寛、笠井敏光、畑田直樹 渋谷 亘、畑田勇二、畑田弘美 矢野富美子、畑田耕一、石井智子
会計	畑田庸雄
会計監査*	澤田秀雄、宮田幹二

*宮田幹二氏には、年度途中に前任の塚本昭光氏の後を引き継ぎ、平成 29 年度の監査を担当していただきました。

新正会員

青山修治、川崎和也、高橋峰和、張えいへい
森さゆり、津田敏子、三島央、竹村芳子

新特別会員

北山辰樹、柳田敏雄

会員数 256 名

特別会員数 62 名

＜表紙写真＞この写真は、畑田家住宅の土間です。天井に見える迫力のある太い横架材が梁、壁にある背の高い横材は差鴨居といひます。現代ではもっと小さい材料が使われていますが、昔はこのように背の高い(上下方向の長さが大きい)木材が用いられて家の骨組みを作り構造材としての役目をはたしていました。このように建物を構成する柱や梁などが見える構造を真壁造といって、昔の家が美しく見える要素になっています。装飾を用いずに必要な材を美しく見せたり、装飾であるかのようだけれども、構造耐力上必要な部材であったりと必要なものを美しく見せるセンスが日本建築の美しさの一つだと思っています。また、薄い板と隙間で構成された簀戸は、まったく遮蔽してしまうのではなく、ゆるやかに奥の空間に繋げて、大戸(現在の玄関戸)から入った人をやさしく迎え入れてくれます。これらは全て、ベンガラに墨などを混ぜた自然の塗料で塗られ、毎年磨きこまれて長い年月が経ち、とても美しい色になっています。年月が経っても汚くならず、味わいが増していくというのも日本建築のすばらしさです。(石井智子)

〈行事に参加していただいた方々からの感想文〉

春の一般公開と第20回畑田塾 2017年3月19日(日)

「音楽の世界における日本と西洋の交わり」

箏 菊佳裕純子、ピアノ 吉山輝、歌唱 畑田弘美

天候に恵まれた3月19日、畑田家の木造空間の中で音の共演が催された。和楽器の箏、西洋楽器のピアノ、そして和と洋の発声の違いを表した声の交わりである。それぞれの楽器の成り立ちや奏法などの説明と演奏を通して、相違を明確にしたうえで協演をお楽しみいただいた。

箏は、日本人でありながらも詳細を知らず、また触れる機会の少ない楽器の一つである。まず、「箏」と「琴」の文字の違いだが、箏には柱があり琴にはない、つまり別の楽器である。一般的によく演奏されるのは「箏」の方である。箏の各部の名称は、龍の姿になぞらえて、龍頭、龍口、龍舌、龍額、龍眼、龍甲、龍尾などの名が付いているとの説明を受けたのち、「六段」の調べにのせてその音色を聴いた。

続いてピアノについての説明を受けた。畑田家所蔵の楽器はアップライトピアノであるが、表の板を外して内部の弦やハンマーの構造を目の当たりにしての説明は、普通の音楽会にはない新鮮なものであった。ピアノを弾くには「筋力」と「重力」が必要だが、筋力は使えば使うほど疲れるのに対して、重力はどんなに使っても疲れない。集中力を低下させないためにも重力を利用することが大切ということであった。双方の力を個別にせず常に相反する力と認識し、筋力は重力に逆らうためのみ使うと疲れは最小限に抑えられるということであった。重力を最大限に活用できれば身体の負担は減少し、その分だけ自然体の感性で音楽に取り組んで自然な響きが出る。吉山さんによるショパンの「幻想即興曲」の見事な演奏で自然体の響きを聴いた。

最後に「声」だが、話し、食し、泣き笑うといった日常使う身体が楽器であるがゆえに難しく、楽器として機能するテクニックを習得することが最初の課題である。そもそも発声とは、息を肺に入れそこから流れた息が声帯を通過して胸部や頭部に共鳴して声が出るという物理的な現象である。しかし言語によって口腔内の様子が異なる。そこで日本語の演奏として三味線で長唄を、西洋の発声としてオペラ「蝶々夫人」からアリアをイタリア語で歌い、その音や響きの違いを聞き比べた。

その後、「日本と西洋の交わり」として、箏とピアノで「山里の春」を演奏し、参加者全員で「ローレライ」、「埴生の宿」の大合唱で締めくくり、会を終えた。

◆数年前に出席した竹中平蔵氏の講演の中で「今はコピーの

時代である。昨日まで新しかったものが、ワンクリックで瞬間に広がり、新しいものでなくなる」と竹中氏が述べていました。ネット社会では、文書による情報だけでなく、音楽、映像もいつでもどこでも手に入れることができます。ありきたりの演奏や解説なら、ネットで検索すれば、無料で手に入れることが可能です。

今回の演奏者ご自身による物理的な観点からみた音源の構造と奏法の解説の内容は、未知のことが多く、興味深いものでした。改めてプロフェッショナルの知識の深さと技術の凄さを感じました。また、解説の技法を思い浮かべながら演奏を聴くことは、新たな楽しみ方のひとつとなりました。

畑田塾へ出席することは、私の生活の一部となっています。未知のテーマについて学ぶことは楽しいですが、何よりも退官後の畑田先生の精力的に奉仕活動に取り組んでいる姿から学ぶことが多いです。毎回、必ず講師に質問を投げかけ、アクティブ・ラーニングを自ら実践して、私達に模範を示していらっしゃいます。私も先生に一步でも近づけるように頑張ります。

(羽曳野市西浦 松浦泰三)

◆暖かい春の一日、質の高い日本家屋の中、すばらしい音の世界を経験させていただきました。ありがとうございました。

「畑田塾」がどんな理念で、そしてテーマで開かれているか全く知らずに参加したのですが、その文化的レベルの高さに、少なからず衝撃を受けました。

今回のテーマである「音の世界—日本と西洋の交わり」ですが、このようなお話を聞いたのははじめてでした。ピアノの構造や奏法の原理からの解説と実演は非常におもしろく、心も頭も豊かになったようでとてもうれしゅうございました。

発声の原理も「なるほど！」と胸にすんとおちました。また、一流の演奏を、こんなにまじかに見、聞ける贅沢に、興奮しております。帰宅して、インターネットをくってみて、畑田家を取りまく多彩な活動を知り、歴史ある羽曳野がますます魅力ある地となりました。

今後は、私どもにできる範囲で、このような活動に参加していきたいと思います。よろしく願いいたします。

(羽曳野市 大西葉子)

◆本日は楽しい時間を過ごすことが出来て有難う御座いました。畑田邸の広間で身近に聴く「箏・ピアノ・声楽の音の世界」はコンサートホールで聴くのととは違った感じで心の洗濯が出来た気がしました。次回の畑田塾も楽しみにしています。

(羽曳野市 柳本 昭一)

◆この畑田塾に参加したのは昨年 Санкт-Петербург 主催の

クリスマスコンサートで畑田弘美さんが歌をうたわれたのがすごく良かったので、またお聞きしたいと思ったからです。

羽曳野市恵我ノ荘に住んでいて畑田家住宅にも関心がありました。恵我ノ荘駅の方には出かけますが、畑田家のある郡戸の方面にはあまり出かけるがありません。

お琴、ピアノ、歌、とてもよかったと思います。

私の家は、以前お父様が西向野の村長さんだったと聞く松村さんに畑地を分けていただいて建てております。主人の父と松村さんがともに教員であつたご縁でそうなつたらしいです。今日は本当に良い一日だったと思っております。

(羽曳野市南恵我ノ荘 森さゆり)

◆最後に演奏者から一言述べさせてください。終わってから生徒のレッスンを思い出して慌てて帰り、畑田先生にはご挨拶もせず失礼しました。あまりに楽しくて、すっかり生徒のレッスンのことを忘れていました。楽しいひと時をありがとうございました。

私の個人的な考えをお伝えした方が皆さん興味を持たれるかな、との思いで話させて頂きましたが如何でしたか。なかなか生徒以外にお話する機会が無いので、私自身新鮮感がありました。ピアノを弾かない人にピアノの弾き方をお話すると、かえって頭の中を整理できた様な思ひです。(ピアノ 吉山輝)

初夏の街歩き 2017年4月23日(日)

「古代を楽しむーぶらり古墳巡り」

羽曳野市文化財保護課参事 吉澤則男

当日は天気にも恵まれ、快晴の中、古市古墳群のいくつかの古墳を見学しました。

羽曳野市役所玄関前に集合後、先ず、羽曳野の歴史概要を説明しました。古くはおよそ2万年前の翠鳥園遺跡にはじまり連続とした人々の営みがあり、どの時代をとっても多くの遺跡や歴史遺産が存在していること、羽曳野の歴史は日本の歴史に大きく関わっていること、そしてこれらの羽曳野市を訪ねることで様々な歴史に触れ、“歴史浴”ができること、を紹介しました。

その後、これら歴史遺産の内、世界文化遺産登録を目指している古市古墳群を巡りました。応神天皇陵古墳西側の史跡地(外濠外堤)を通り、拝所へ。次に、大鳥塚古墳から野中宮山古墳、野中古墳、墓山古墳を見学し、最後は峯ヶ塚古墳まで。特に、野中宮山古墳、大鳥塚古墳、峯ヶ塚古墳と、築かれた時期の違う三つの前方後円墳に登り、その大きさを体感するとともに、時代毎に変化する前方部と後円部の大きさや高さの変化を見ていただくなど、少し汗ばむウォークとなりました。(吉澤則男)

◆この度、「初夏の街歩きーぶらり古墳めぐり」に参加させてい

ただきました。私は12年前から古市古墳群を中心としてガイドをしています。また、畑田家住宅と同じ羽曳野市にある吉村家住宅保存会にも属しております。古市古墳群も古民家も保護・保存し次世代に継承するために地域に活かすことは全く同じ原点によると考えています。

今回、私が参加する動機になったのは畑田家住宅活用保存会の学び場つくりの視野の広さ、角度の違いにとても関心を持ったからです。当羽曳野市の活性化は古市古墳群・古代寺院・古民家・街道等、恵まれた歴史的文化的遺産に愛情と誇りをもって臨むことを再認識いたしました。(羽曳野市 細見 克)

◆この街歩きはたいへん楽しく、お天気にも恵まれて、とてもよい日だったと思います。

私の近くに大塚の古墳がありまして(恵我之荘駅のすぐ近くです)、なんとなく古墳には親しみを感じておりました。今回、古墳巡りに参加して、いろいろご説明を受け、また質問にも答えていただき、より一層古墳にも関心を持つことになりました。また古墳の近くには地震も起きないと思ひ込んでいたのに、応神陵には地震の跡があると聞いてびっくりしました。あと、三つの古墳にも登ることができ、こんなに近くに史跡がたくさんあることに気づかされ、毎日なんとも代わり映えのしない生活のそばに、歴史が隠されていることにもおどろきました。こんなに近くに色々な古代の埋蔵物があることや古墳のあることも何十年も気づかずに過ごしてきたことが、不思議な気もします。

学生時代は、歴史が好きだったのに、近くの古墳をただ風景のように見ていた自分がいます。今回は本当にいろいろ教えていただき、とてもよい日だったと思います。ありがとうございました。(羽曳野市南恵我之荘 森さゆり)

◆青く澄み切った空と若々しい新緑の緑に十人余りが4月23日、羽曳野市役所の吉澤則男様から丁寧な説明をいただく古市古墳群のウォーキング会に参加、本当に贅沢な“歴史浴”を与えていただき感謝申し上げます。

私は、今回の催しに参加するにあたり、古市古墳群について幾つか疑問を持っておりました。一つは、ヤマト政権がなぜ河内平野へ進出してきたか？ 二つ目は、応神天皇のような権力者であろうと建造するにあたっての政治力・経済力そして宗教力基盤を如何に誇示できたのか？ の二点でした。前方後円墳、方墳、円墳の権勢違い程度のことは知っていましたが、陪冢ばいちょうについての知識は初めて教えていただきました。また、出土した埴輪に直接触れさせていただくことが出来たのも感動いたしました。全て吉澤氏からの詳しい解説があればこそ、古代のロマ

ンに浸る価値が倍増、より一層古墳について探求したいと強く印象付けられる企画でした。収穫多き一日であったことに感謝いたします。畑田家住宅活用保存会の世話役の皆さまの心暖かい設営、今後ともよろしく願いいたします。

畑田耕一先生の奥様が逝去されたと聞きました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。(大阪市 森岡昌利)

秋の一般公開と科学フォーラム 2017年11月12日(日)
「脳とAIとゆらぎ」
大阪大学/情報通信研究機構脳情報通信融合研究センター
(CiNet) センター長 柳田敏雄

柳田敏雄先生は、筋肉の収縮の仕組みについて従来の学説を覆す研究によって若くして世界から注目された研究者です。先生は、筋肉を構成しているタンパク質の集合体を観察する実験手法を駆使して、それらが実際にどのように動くのかを「みる」ことに成功されました。その後、研究領域を生物学の、あるいは人間にとっての究極の研究対象、「脳」に移され、脳の中で起こっていることを「みる」ことによって、脳の働き、認識の仕組みを独自の手法で研究されています。このフォーラムでは、いま注目の人工知能AI(Artificial Intelligence)と脳の働きの違いを様々な観点から、様々な例で対比して説明していただき、改めて脳の不思議さ、すばらしさを再認識させられました。(北山辰樹)

◆先般は、畑田先生宅の歴史的建物の見学および柳田敏雄先生による「脳とAIとゆらぎ」のテーマでAIの最新の動向と先生の研究について大変興味深い講座に参加させていただき感謝申し上げます。以下、その感想を記させていただきます。

AIには、囲碁などのゲームや自動運転のように対象が限定された「特化型AI」と、状況を限定しない「汎用AI」に分けられ、前者はすでに産業応用への拡大が著しく、我々の「働き方」を激変させる可能性が見えてきた。AIはコンピュータに膨大な情報を与えて演算し積み上げることで機能しており、ある面で人間の能力を凌駕するまでになったが、コンピュータを動かすのには膨大なエネルギーが必要になる。一方、人の生命体をコントロールする「脳」はそれよりはるかに少ないエネルギーを使って様々な情報を処理し、AIには手の出ない認識機能を司っている。その秘密は、脳の「ゆらぎ」、「ひらめき」など、コンピュータとは全く異なるメカニズムにある。柳田先生は、その仕組みを解明して「脳」のシステム、「脳」の力をAIに活用することで、現在使われているAIの技術を凌駕する省エネAIを開発することを目指しておられ、実現すればこの分野で遅れている日本が一気に先頭に立てる可能性があると言説された。今後AIは限りなく拡大

発展するであろう。そして「人の生活」「産業構造」を変化させ続けるだろう。そのとき我々には、より創造的な「脳」の活用が益々必要とされるだろう。また、会場からの質問でも指摘されたように、将来のAIの利用には強い「倫理性」が要求されることも忘れてはならない。(羽曳野市学園前 歌谷利昭)

◆今日は楽しく充実した講演会に参加させていただき有難うございます。当初、テーマについての私の能力で理解できかねるのではないかと心配していましたが、柳田先生のやさしい解説で脳やAIのことに興味を持つことができ、あっという間に時間が経過していました。気の付いた点は、①畑田家の居間に20~30名の参加者で講師との距離が近く、真剣に話を聞けたことが良かったと思います。大ホールで聴くのと全然違います。②質問に丁寧にお答え頂いたことに驚きました。また、世界的学者の先生の間人性・謙虚さに感服しました。次回の3月18日も是非参加させていただきたく思います。(史友会 川上裕久)

◆「脳とAIとゆらぎ」、このテーマは数年前から興味があり、今回もお話を心待ちにしていた。最先端のお話というのもその理由だが、「ゆらぎ」という言葉にどこかで救いを感じていた。「人は迷ってもいいですよ。迷いこそ人の人たる所以ですよ」と。さて、人間とAIの囲碁勝負が示すように特化した分野ではすでにAIが人間を凌駕している。しかしここに見えてくるのは人間とAIの役割が異なるという事実である。赤ちゃんが生まれ成長して人間として育ち普通の行動、普通の生活をする中にAIとは全く違ったシステムが働いているというのだ。費やすエネルギーは1万分の1。このシステムに大きく貢献しているのが「ゆらぎ」である。一見無駄なもの、迷い、いい加減が意味する価値こそ大切で「人間の役割」を考える大きなヒントになる。やがて「仕事」はAIに任せる時代になる。幸せな人生の描き方が根本から変わるのだ。これに答えを出すのは次回畑田塾。ぜひ議論してみたい。(八尾市 神野武男)

◆畑田家住宅で「脳とAIとゆらぎ」について、世界的権威の柳田先生から膝を交えてお話を拝聴できた事に感謝申し上げます。

現在のAIは莫大なデータ量の積み上げとエネルギーが必要であるが、人間の脳は色々な可能性を一気に想起し、ひらめきや直感で最良を省エネで選ぶことができる。この脳のシステム、「ゆらぎ」の応用で異領域多様、想定外の問題でも解決できる汎用人工知能AGIが出現、例えば人間は仕事をしなくてもすべてAGIがやってくれるようになる。

AIを社会や人の為に役立たせる方向に使えば良いが、悪用すると人間は滅びかねない。AIの技術開発と共にその目的や倫理道徳教育もグローバルに重要課題になると感じました。

脳についての疑問や AGI が実用化された社会等興味は尽きず、講義の 3 時間があつと言う間に過ぎてしまいました。有難うございました。
(八尾市 堀正博)

◆事務局長の耕一さんから、おもしろい話だから聞きにおいでと、お誘いを受け参加させてもらいました。AI? 脳? ゆらぎ? …途中で眠くなつたらという心配もどこへやら、講演・質問・討論と、あつという間の 3 時間でした。終わってしまえば、あれもこれも、お聞きすればよかったと残念に思っています。世間は AI ブームだということに遅まきながら気づきました。

柳田先生の話から、AI と脳の違いが分かりました。人間の脳は、たった 1 ワットで働いていて、いつもゆらいでいること、それに比べて AI は 200 万ワットの電力がいるということ、また、AI は物事を認識させるために、たくさんの写真や資料を読み込ませないといけないが、人間の脳は、数枚の写真を見ることで、ものの概念を認識することができるなど、はじめて、人間の脳の能力のすごさに驚き、これらを知ることは大切なことだと感じました。

私は保育園で、新鮮な(?) 脳をもつ子どもたちと、日々過ごしています。講演後は、子どもたちに間違つた認識を植えつけてはいないかな、と仕事に不安を感じていました。でも、子どもたちの日々の成長を見ることは、楽しく可愛らしいものです。例えば、2歳ぐらいの子どもに目薬を入れてあげるとき、「パチパチしてごらん」と言うと、手をパチパチと叩きます。また、まだ言葉の発達ができていない1歳過ぎの子どもは、土山の斜面がうまく登れないとき、服が脱ぎにくいときなどに、「かたい」という言葉をたくみに使います。これらは、発達途中の子どもたちの素晴らしい表現力ではないでしょうか。そう思うと、この仕事をもっと楽しもうと、気持ちが楽になりました。

子どもたちには、手足をしっかり使い、五感を通してこの世界を感じ、成長してもらいたいです。そのためには、子育ての環境はもう少し不便な方がよいのかな、と思います。

ゆらぎから離れてしまいました。結局、難しいことは、先生方におまかせして、私は“1ワットのゆらぎ”の人間社会の中で助け合つて暮らすことも大事にしていきます。

最後に、午前中、畑田家住宅を見学に来ていた4歳の坊や二人が、中村先生に、柿の木から実を採ってもらつて手渡され、時を前後したのにもかかわらず二人とも、「つめたい! 」と、言ったのです。初めて、もぎたての柿を手にしただろう子どもが「おいしそう」ではなく、「つめたい! 」と言つたことと、この子たちが大人になった時、柿を見て、子どもの頃、大きい古い家に行ったなあ、思い出すかもと思い、一人で微笑んでいました。

(羽曳野市郡戸 畑田佳江)

◆スマホではもやもやしながら返事を待ち、手紙ではワクワクしながら返事を待つ。岡山県中学3年の国府優花さんはそんな違いに気づいたという(読売)。若い人の中にもこんな人がいたのかと心強く思いました。ボタンを押すとすぐ答えてくれる。それで知識は増えてもその中からの確かな情報を選択することができるのでしょうか。

本を読む、ゆっくり廻りを見つめて生活する、そんな中から情緒や感性が育っていくのだと思います。また、困難に合うとそこから抜け出すためにいろいろと考えます。そういう機会が若い人に殆ど無くなっていないのでしょうか。

柳田先生のお話しは、難しい内容にもかかわらず、先生と受講者間で質疑応答が活発で、楽しい会に参加させていただいたと喜んでおります。都合で前半をお聞きすることのできなかったのが大変残念です。
(生駒市 吉田睦子)

春の一般公開と第 21 回畑田塾 2018 年 3 月 18 日(日)
「自分探しの旅 — 科学、音楽、美術を通しての提言」
この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

文化財住宅の一般公開と活用を考える

大阪大学名誉教授 畑田家住宅活用保存会事務局長 畑田耕一

羽曳野市にある筆者の生家畑田家を国登録有形文化財に登録したのは、当時の大阪府文化財保護課 林義久氏の強い勧めによるものである。大阪府の登録文化財の数がここまで増えたのも、大阪府登録文化財所有者の会が全国で初めて設立され、活発に活動できているのも、彼に負うところが大きい。

畑田家を登録後しばらくして、ある種の使命感に駆られて、一般公開とフォーラムを始めた。先ず、韓国の留学生金明珉さんが畑田家を訪問した時に寄せてくれた感想文の大略をお読みいただきたい。「畑田さんの生家での体験は私の心を感動させた。昔からの日本の姿が至る所に歴史とともに静かに息づいており、日本人のやさしい心使いと知恵と歴史が伝わってきた。それを未だ守りつづけていることも私の心に感動を伝えてくれた。そして、いつのまにか、嫌いだつた「たこ焼き」が大好きとなり、おかつ「焼そば」を作るようになっていた。少しずつではあるが、確かに日本を理解し、本当の日本の心にも近づいてゆく私自身の姿があつた。私は今、自分が探してきた本物の日本の姿を身近に感じ、日本の心にも近づいている」この一文は、畑田家が外国の人に日本の心伝える強

い教育力(住育の力)を持っていることと共に、その保存が日本文化の進歩・向上に大変重要であることを示唆するものである。

一方、現在の日本の住宅は機能的で便利であっても、隅から隅まで見えていて、隠れん坊などしようのない、ゆとりのない空間である。このような住宅空間から、落ち着いたゆとりのある社会を生み出すことは難しいと思う。教育の世界も含めてゆとりのない社会から、新しい文化が生まれ、深まることはないと言っても過言ではなからう。日本の古い家屋は、これまでの日本の文化の担い手であるだけでなく、新しい文化発信の拠点でもある。これを活用・保存することは、「文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界の文化の進歩に貢献すること」という文化財保護法の目的を達成することであり、筆者畑田はこの仕事に使命感と誇りを持って取り組んでいるのである。(参考: 畑田耕一編著「むかしの家に学ぶ」大阪大学出版会、2016)

ところで、筆者の文化財建造物公開・活用への思いの最たるものは、住居の持つ教育力、すなわち「住育力」の大切さを皆に知ってもらいたいためである。建築は作られたときから独自の文化を担っている。それを使用し、住まいする人達はその建築に文化を感じつつ、さらに異なる、あるいは、新しい文化を付け加えていく。使用する人の必要性、考えや工夫によって加えられた住宅の改造や置かれた家具もまた文化を担う建築の一部である。住宅の場合には、柱やふすまの瑕や落書きさえもそこで生活してきた人々の歴史の証である。建築は住まいし、生活するところであると同時に、人間の歴史を学ぶ最も身近な教材でもある。建築は、まさに人が歴史・文化を学び、それを伝承・発展させるための教材であり、限りある人の命を超えて文化を伝承する文化財であることを忘れてはならない。

筆者らは以前から人間が生きていくための三大要件、衣・食・住の中の一つである住について、伝統的木造日本住宅が人間形成と文化伝承のための教育の場として大変重要な空間であることを述べてきた。冒頭に記した金明珉さんの畑田家訪問時の感想は、現在の日本人が忘れかけている古い伝統的な日本住宅の良き一面を再認識させてくれるとともに、古い日本住宅が持つ文化伝承の場としての性格を見事に言い表している。彼女は日本に来てから畑田家に来るまで、ずっとアパートに引きこもっていたわけではない。大阪大学の学生として日本社会の中で生活し、学び、大学の教員・学生はじめ何人もの日本人に会い、大阪以外のいくつかの街も訪れ、博物館などへも足を運んでいた。それにもかかわらず、よく分からなかった日本人の心を、畑田家に来てわずか数時間で理解できたという事実は注目に値する。長い間、人が生活してきた古い伝統的木造住宅の文化伝承の底力、すなわち住育の力の大きさを見せつけられた思いである。古い家の住育力の中には「勿体ないの心」を教える力も含まれることも忘れないで欲しい。(参考: 畑田耕一、林義久「伝統的木造住宅の住育の力と歴史的建造物の保存継承(2007. 7. 1) <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/jyuiku-pdf.pdf>)

畑田家でのフォーラムの参加者と講師・演者は、畑田家が実に講演と討論を行うのに適した空間であることに驚かれることが多い。90分を超える質問・討論の時間を楽しく過ごせるのは畑田家の住育力のお蔭である。一流のヴァイオリニストやチェロ奏者が一流のホールと変わらない畑田家の音響効果に満足し、「またやろう」と言われることもある。これらは、フォーラムを開催して初めて分かったことである。畑田家が登録文化財に登録されたことが切っ掛けで始めたフォーラムが、筆者に古い木造住宅の素晴らしい機能を認識させてくれたわけである。有難いことと感謝している。

一般公開、特に畑田家住宅活用保存会主催の場合の参加者には、古い木造住宅の構造・機能・住育力・歴史などに強い興味と関心を持つ人が多い。建物の保存や活用保存会の運営などについていろいろなご意見をいただき、われわれの建物の活用保存の努力に対してお褒めの言葉をいただくことも多い。これらは全てわれわれの活動の原動力になっている。ただ、いくら「一般公開」と言っても個人の家であり、公会堂を公開している訳ではない。この点を理解できない人が偶におられて、勝手に歩き回るのを注意すると、怒り出される方がある。しかし、勝手に“つし”(屋根裏部屋)にのぼると梯子から落ちる危険性もあるし、石灯籠に触ったりすると倒れて大けがをすることもある。「もう一般公開は止めよう」という意見が出てくる前に対策を講じておく必要があると思う。

最後に、登録文化財住宅に限らず、伝統的住宅の保存に関わる重要な問題に触れておきたい。それは、住宅の相続時に起こる住宅とその敷地の消滅である。登録文化財の場合には、30%の税額免除が適用されるが、それでも相続税はかなりの金額になる。登録文化財の所有者は、文化財の敷地以外にもかなりの土地を所有する場合が多く、相続税が1億をはるかに超える金額になることがある。この様な場合に、相続人は文化財建造物を土地とともに売却せざるを得ない羽目に陥る。相続人の文化財の保存・活用への熱意が元の所有者(被相続人)に比べて低い場合は尚更である。古い素晴らしい住宅も含めて日本の国土を、固定資産税を払いつつ、必死になって守ってきた国民を失望させてはならない。この問題を解決する方法はただ一つ、それは相続税制度の廃止である。これは速やかに実現させないと、文化財だけでなく、日本国土の消滅にも繋がりがかねない。多くの方々のご理解・ご協力を期待している。

水仙や 描かぬままに 昨日今日

年の初め、郡戸の庭に水仙が咲く。南天の赤い実が寿ぐ気持ちを引き立てる。
梅の老木のつぼみが日々膨らみ、開花を待って庭に降り立つ。

春来ればまづ咲宿の梅の花かをなつかしみうぐひすぞなく 源実朝

納屋の裏庭のふきのとうが雑草の間から顔を出す。柔らかい茎の煮物が食膳を賑わす。
小さな菜園を作って苺などを植えたが、赤い実はナメクジを喜ばせた。
いつの間にか、ゆずり葉やイチジクの木が無くなり、桔梗が咲かなくなった。
庭の中央に花壇を作ってチュウリップ等を植えて、カラフルな開花を楽しむようになった。
曼殊沙華はきまって彼岸に赤い花を咲かせる。自然の妙理に毎年感心する。
ムラサキシキブの実が少しずつ大きく紫色になってくる。コスモスが風に揺れ、蜂が何処からかやって来て、
花の蜜を吸う。
東蔵の軒下に立てかけてある木製の梯子に毎朝ぶら下がりて数を数えるのが私の健康法である。目の前が同じように
見えていることを確認して安心する。

松の木に鳩止まり居る歳の暮れ

年末のあわただしさの中で、鳩が居場所を見つけてじっとしている。
柿の木は毎年沢山の実をつける。木の背丈が伸びて、長い金属製の竿鉋を用いても、挽ぎにくい。昨年は
殊に沢山実をつけて、葉っぱが全部落ちて門屋あたりを埋め尽くした後も、
たわわに残って、今年は正月にも熟した柿を味わった。味は数十年変わらない。
一番変わらないのは主屋や蔵等の佇まいである。これは当主の畑田耕一氏の普段の目配りと、細部にわたる
補修の努力のお陰である。
堺と古市の古墳群の世界遺産登録への機運が高まり、伝統的なものに対する関心が深まってきていることは
喜ばしいことである。

この度、都合により畑田家住宅活用保存会の会長職の辞任を願い出て、承認いただいたことを感謝しています。
これからも、脇に回ってお手伝いをさせていただきます。

平成29年4月1日から平成30年3月31日までの収支決算

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	-92,204	講師謝礼	60,000
会費	654,000	年報作成費	64,800
寄付金 ^{*1}	170,000	出版書籍購入費等	346,680
雑収入	3,900	通信費(郵送料、振替手数料等)	82,510
		事務費	24,201
		雑費	36,824
		次年度繰越金	120,681
合計	735,696	合計	735,696

^{*1} 神野武男、柳田敏雄、浜中佐和子、
齊藤園子、北山辰樹、畑田弘美、
中村貞夫の7氏より御寄附をいただきました。
感謝申し上げます。

会計監査: 会則第6条の規定に基づき平成29年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも
適正かつ正確に処理されていることを認めます。 平成30年3月31日 監査担当 澤田秀雄 ㊞ 宮田幹二 ㊞

事務局 大阪府羽曳野市郡戸471 畑田庸雄 電話072-762-7495 E-mail hatada@wombat.zaq.ne.jp

畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo>

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いいたします。

あとがき: 平成29年度も皆様のご協力のお蔭で一般公開とフォーラムを楽しく充実感を持って行なうことが
出来ました。出版「脳とAIとゆらぎ」は柳田敏雄先生の科学フォーラムでの講演と討論の内容をまとめたもので
す。本年報と一緒にお届けしますので、ご一読いただいて、これからのAI時代をどのようにして生きていくの
がよいかを考えていただければ幸いです。今後ともよろしくご支援の程お願い申し上げます。(KH)